



10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 20 30

燕石種蜘蛛之卷

二
輯

七



14
679

通書

印相印

聯乃系卷

此書を吾一時の漫筆取らず、自叙のへと並
お能のうわえい出たる事或は古考の間、事取
せ端紙をもつて、あきつらう事と書也取らず、
の原本を知音の翁たち西人ふれて追加を乞ひ
て、此書の市川深川櫻痴が寓居して北氏元吉
に以て北齋蘆翁之所、たゞ時備書せし中を
誰人か能ひてかねあく見えぬ日曆花印づくをも
ゆくを燈下で見ゆるに、佐多の誤譯もあらば、其書
うちもあきのとある所、五ふけを知り得り稱之朱
書、待りうるを取多幸あゆみに取れりあゆり玉
ちゆり

ゆうとよく我が朝をほたすをかかづる殊の巻

弘化四年丁未十月吉日七十九歳京山人百樹書

岩歟百樹翁其辰の御神大八翁よりぞれ御子方
醜高京傳翁のちくわが形を京山老人と云ひて年比祝
くむつびゆをせらるるひの友とて京傳翁を遇し文化の
十年の夏月木の葉をとおちうせうれ形をまの
みひくの錦毛色もつせひそりの色をとひまわ
り一高神君の一代の具節の事業もそのまこと
筆をかきかねつて多めをゆかへ書元と神代の驚
異すし名をあげつを百樹老人ひよすとて是
ふじれな事又古事考思ひ出うきすふすかんうかび
うかきう書字をえてやうて跡の余巻をうて見せう

此を醜高翁のおりかげほのくはあらうてすもくまき
百樹翁と我を同一明和生まれをた一年のたどり
移行れかとくふ八十しかく咸和中からあゆく形の如
きの世の事とすのうれり具合あらかじてもゆうる
い洞とぞくとまゐり行を山をてたくにれりと一巻
かぶれりする甚り書形てよきとすとくふまひし共
たゞすくふくせ形の如

弘化三年の夏

七十九翁高藤彦磨

叙言

高藤彦磨大人をおりれ、是形を醜高翁の字ひ

言ふゆづれゆるにたる急音の益美形、されどあれもまた
其琴の音がつきとおもつまを絶さむかくと間を穿
て事ひ三十余年ねじらうるや風をそぞるる形
百大人を尋ね一時一冊を讀んで聞きぬる玉へ
其音程りゆきりゆき是れも古代の餘聲也と人
羨めりつゝ昔の人手を稀、携りたる事あるべく書
て見玉ひ、和みを至るる大人を今年七十才まで一岁せ
の是れを大人の形、事ひゆく小行同健君
り吟咏白樂天、七年、瘦面をとの形、すら年年の秋
か月をあゆるをかほり、うちつてやあゆきも古代の餘聲
ふともうさへ一を拾ひて是れは小見の忘却をも思ひ出
て硯の匂は筆をなべ、其筆皆見ゆるは筆痕の穢
ハ敷て文を飾り無事もの形、は字稿たゞ形にて写

思ひ出れを筆を隨ふきを年序の前後自ゆの詮義
ひそむほつる形、其氣言しきとれども別ゆぢく形を
さうとつむれ作らしむをゆすみてゆせよとせ共
皆の軒を行はうるあらまし形ゆる筆の筆を観

死ゆゆきすもとをき看ゆる筆ゆる筆の筆

弘化三年丙午更衣の日 七八八歳京山人百樹

茶番

茗窟賣

さざい

女髪結の娘

中間の娘室

十八大通

黒河の名跡

妓風

娼家之樓是の娘

文黒の名跡

白猿の娘

梶絣袋の娘

菓子の賣括

てんあくの始

琴曲の賣括

料理茶屋

隠一賣女

疫 痘

市牛所降方

行人坂大火

白刃仇を斬方

乞巧鐘馗の捕生

朝參り

天鼓の天

火事

寺壇一

市人ノ数

賀多尼足年方

永代橋山崩落

鬼子母の折合

天明中戯作者

馬琴昭信

三毛子の賣括

鞆橐以来局平二百余年枝を折るを反覆り已千余
の春を算うてきよみの剛をかすめの歎を換へて度す
人集うてア氏勢服うて妻を遇ふきめ おもひゆく
市取うてア山とおもひてらうてつを更にあく折り
大内アの船島たるや武氣せきの逃れハジビシの逃げ
堀森ア井口ア砂船く玉川の虎れハ衝うて降りる

きりて千門萬家かとあるしのぞ思ふ先をもてりて
事立つてあらす抄山を筆ふりせて大内アの柳へ亭
たる事せんと記 たらお房物集事蹟合著む
くわ信香基里柳説ね下隨筆就序隨筆を書く
歌詠あると行ゆて明和以前の人たちもすとモ歌色近
き三十年のむくと今より暮き人をあそび抄山も筆
すと形ひよのとく たゞ、何べ京中を有する筆者や
何くか山うと思ふつてアトモ度翁、永代の餘慶
の舟よの裏人余ひううて庸為う玉の葉を歌ひ却方

四字下

茶 番

おりれ 京山 は 亜和六年己丑の歲の年中まで天明元年
辛丑 は 十三年の年秋 されば お心し行つて見ゆけたる

聞

事、寧に少く度々たれを用ひ出でる天明五年の十
月、所53有りて御形、御家より扇あらへ、と萬番の事
何、はふ安をうち家の御ちおたれ、或は櫛家より度々た
れ也、萬番より是は鬼の鉢持二階の同姓獨り居
て木梗はて、卑怯の譲也、其時君名は任任たる堀
の師匠門人は娘を歎詠也、は樹下す、其役
留同より近形は事中はの御は内はもつちとよ影を趣向
しむる當時、北廊はたつて特高はうつて五所はひ
し、は扇形は是は櫛の影を取たる御家を常はに移形
きて、萬番の日は至せり、其年はかくて正月はて、是は年十
四は、人扇を移萬番下すを重きて取たり、中筋をや景氣を
て、痛いたるを座形船を乗たる、一石橋を架たて、是は萬番
の家がつづく廓中の姿が、形を見たる入だるをあゆ

十三時日向を見ゆ
獨り草畜か耶
時五所竹弓の弓を以て往け
小舟をあらきちとを以て
萬葉及ちんすす時才三入
の先づて左所をうちたまひ耶
時強すましるづちを五年持牛す
秀力歛う内をあて餘つてちとを取す此時才ふの船をあ
三絃やて餘矢の歌を唱ふ皆と廓牛の歌被ふ
餘の身振をあて弟をうちたまひふ年よ船をあらゆ
あらゆ事の半入られ者もか引つて馬を乗ひ入
一弓代倒せきとを以て
形を改て矢を踏み大
形を三弓へ箭をびろとすて作りたまひ入同
箭をさせをと入らばたゞくまつて見せ
を大弓へ替へてを箭を置くかく入同

の山東齋之文均一ノ如ニテトウモ形を有する也
其後連年ヘ考ふ厭らセラヨリ 桧亭牛霜も一ノ如ニテ思ふ
其處中、乃れ肉林食之甚也雖々子雲唱萬言時所
過者四十人酌を嘗て鬼金捧々不鄙。是其也
を嘗め方也云爾よ以てたまひ入也
茶齋連年たゞく事へ有成たれ定すを起て
煙を立ツテ 茶齋立ツテ 烟立ツル形
も天朗の時弟を知る事

うらやま。扇うらやま。つゆみばく
ゆくせの半形うらやま。おもむきを貰ふ。たまはましゆく
ゆくはまく。かくはまく。錦絣の扇。あらわす。扇
うらやまく。かくはまく。扇。あらわす。扇

て臂負ひ拂ふ通。力氣をもとづけ。問んちまくちや。ほくろくらへしゆうじて
賣りや。さくらんちや。ほくろくらへしゆうじて
賣りや。大方を差しめ二きれ形と錦文の三枚
一本十六文形。若想束形。とある。○風も三枚
七〇五枚錦絵。右の本片をうち我居自云雲
少翁居み數ひく少し持つ形と錦形。あひかゆる
七八八つの時と端紙四甚度十二三より既元年明
風字。章紙がてて龍蘭窟の字。能く双钩字の樂字
を薙又を薙かづり字と珍らう。左室とて甚
ひづく古今の字。風は下ふ。子供甚ひれ。又扇畫
字つづりの字。扇の形をとれ。あとつづり。事わざ
をせよ。甚ひづく甚葉を陳ゆ
ゆと自己勝半がんく。おやうと形を先き

市川門主
和石井主

力の男のをうぶかづひ入らんをば紙をうせ骨をえ
せ甚程うて折て賣る。和代市川つゝ物主一を経
者扇の柱言ふと「たゞ事わくをもとて徳めほ
遺風」と實政が至りて絶矣。

○詫前大賣。さどいざれ

お詫前此誠未といりてふうれなきとせやつひて是を
ハ少す年始の達事多々家あふあと事形。故大晦日
み囲碁か「ちせやをせ」せうく聲を口にちきり
て坐りうるも今きもす。同此過寶引うけ社室
引の魚と特典をもくよを承ひを入形。第一節の
行方の詫前特典を仰げ。まふ伝て高下あくに小遣
き余一ツをまくに宝引うけをうけたるはの過宝さご

竹を以て見供せ聲をもくべは足の端不を知りて聲
引たりと松の内を盛り十日以上も承看一つの景
物也。山實政が禁令ありてぞ、聲物

○女聲絆の起立

山下金作室脣
七始アリ
妻あう未三度自
アリス
百樹再葉天保
十五年正月大賀持二
子年袖鏡と云
物言教始宗の事
記之内、女房絆
ハ成程年才始
夫少子思子傳
金作、サムサム

妓の聲を度す
いのちの身
うたひかく
うりこ山ゆ
せきせきを
ぬぐひ

止齋齋主の娘の如く男の情をゆきすを好む者也
かくもせよと形う女の誓をやめ事も御事印形
うん等有様は八所塔ちあすて少く行難名をも
或ひやひよ形をゆいわうとも女の中は何うてかすが
をすらせ角あゆの跡へ即ち往ふるにれど女形をゆきを
れぬ萬からりと驕り形うて化して識うる故に悪風
流れやかまし物うきうきと實故三年それこそ東
晉修了不羈同好すたゞ始焉とくに其後百、殊方
すそ殊や子雲を自云の者も多く坐きたるゆえ起立
而起とづくと五年也形うて給之又えあく又えあ
しゆくせ候候も御ありゆくまう候く者も極く輩を引
めおもく形は八所塔の布半の婦女は誓候所を引
知さる事多是也がゆの百、妖同を毒を陳せば

此景を誰がよみ時々遇ひ此狂風一時不止たるやト
芦飛き事多き

和布曰摩羅漢
女髮絲之印

卷之三

○ かく 宅。牛
1991

宜其菊降之頃 天明四年辰の四月 東日廊中 由良兄弟
罗山子、街談錄、
妻の弟、近來男少大廊下強被亡。行定ハ西國某處駄形黒舟所
す自終甚異。毛髮本多トテ中刺形。きせ時雨不形人今。由良の店橋ヨリキウニテ髪膏カツコウ
高り傍アツシテ髪膏カツコウ下
夕鬱ヨリテ油オレ合セス
ス梯タマ、齒ヒ入ス也
竹脚タケヅ通ス後ロ)
方カ油オレ有リ置ク
其塊クヘイ潮塊ツイ

眉ハニラ月トテ細リ
抜リニラ童テ着、
便スロノ時、諺、
疫病本多カツタ
眉宿ナニ姿云
女稀斗サラニ
鉤是ヨ用ヒビニ
指クムモノ鱗ナキ
或ニ銀ニテ作リ鬚
模ヨリ通ヌ髪
多筋ヲアヒウツラ
カニセニ爲ニ名付ル
燈臺じニトニテ
燈台燈ラム

の時那ノ村ノ牛川也カナ代ム人ノ居ニ
シテ久留年トキ也論及チテ牛川大僧正南
川也中三國余川牛ヘニ母子事多シ未惺ニテ
居テ人向テテ人寂テ斗行テ人也ムおはす
居テテ人也ム亦三四罪也テやうふ豈名レ唐豪也
家也中原也舞也テ東を主テ行方中ニテ行
の方也行方也行方也尾也テ一ち原也壹也行
理也也テ三原也行方也行方也原也行
を主テ行方也水而未映也遠也行方也
序也也也也男也行也也具也あも多也
都也也也也也也也也也也也也也也也也
非人也行也也也也也也也也也也也也也
少妙也行也也也也也也也也也也也也也
行也也也也也也也也也也也也也也也也

小野家。さ山也木や錢を一人前百銅。是よりて鶴市、轟
の妙を知る。年一歳以上市川、高麗も之婦人ふ。才更ひい
まつり。行ひ。言者か其聲市都より仰せ。故能もつち
衣裳を。其聲包をつめ。八百乳ナシ。不孝也。
是鶴市うちあやし。所以と取れ。不の運氣。度ておのを
うれ。わ狂ひ。わ詫。扇。毛羽。若草。おちあく。事を八百
乳。千乳。仲乳。高乳。寒乳。然呈好歟。又。牛乳。馬乳等
其聲を。り更歎。前つも身。お。お山。ひ。お御。て。自
すま。字。あ。妙。や始。左形。非。人。毛。づ。ま。二。二。形。左
や。て。鶴市。つ。て。一。聲。を。承。を。一。幕。下。て。お。守。一
百。銅。牛。門。竹。一。以。之。五。月。元。供。う。唐。元。セ。乃。そ
鶴市。り。が。見。せ。知。过。唐。牛。社。方。點。の。牛。の。四。季。尾
力。明。樓。扇。を。始。次。少。廊。の。偈。家。ナ。ア。ル。ハ。後。完。

之を有せし祇にて天明年の一在銀臺下の詞す
つ手四一於七八十の老人不尋ね事其時考仰程ニシテ論
セサハシテモトモナリ

周ふ云花街櫓を之明唐の大火で云者多數櫓之
全三ノ年酉年承考京之禱十六年をもて安富
居士音有七百戸戸二月花をさむ松也ひづ出大
一廊ウツラハ櫓を此時後定取後四年立
て明和五年子年四月後四年七百室四十戸戸二月四日也
中云松也ひづ出火一廊櫓を後定取後四年。
橋場山名。名刻。云後三年後四年うちく明和八年
四月七日福島所は後定取後四年松也ひづ出火後定取
全一ヶ年後四年辛未年二月九日草年少改え同
黒川人松也出火商風碑を取後四年一廊小櫓七絶毫

西本色。深川其後十年辛未天保元年丑の九月晦
自候見断家田公隣をうり出火一所櫓を後定取
四年うちく天明四年辰四月吉日申酉虎和
葉素枕移し出火後定。西國。益木。駒形。黒
船所甚後四年うちく天明七年辛未年十月九日角
折り出火古文書後定。大櫓也。深川。承化全
八幡宮。牛糞。高輪城後八年大字の實政六年
寛四月二十九日戸二月下承を落成落成之
出火後定。田所。駒形。山の宿。貞承七年
うちく實政十三年甲子十二月大字の田園北泉寺
申吉月考。田園北泉人松也出火後定。今小字
が。深川其後四年うちく文化十三年五月吉

其時深山人見先手のを考足立かうての云物立わざなふり立りきどり

京師の娼家をもとめに此處に來る
之後今三十一年の月積も入る耳
因ひては已むちうそひを譲りん

十八大通

和巾曰方通之
八田西全東之兩
方中之

元祐より比徳は多文を事ひて我木屋、間も七八十
塙一所のまづらに持地而多く大廈高臺と構へ居る所
で紀文也は今も甚だ人所の勝景す其角又人所の能
名堂と千山也は甚角り五え集まし千山り定め之を有
三え首見へてかく教文ひそせ巖剣の所花街を有
草平の古跡庵を有て豆腐をちぢむ事碑子もつてある
み考究も見ゆ委之らが先の紀文也の古著物の家業を破
りぬ草平降川一の多良木の所に古の移居者

後御書の宗直某能又、経験^を學んで其方より井
経張^{みえくわ}あり何^{いか}、之處古^いに色^{いろ}を經而^{くわ}張^はう有^{ります}
多時修^{なが}めつひきやあらかとく經人^の經^{くわ}、政^せやうん^ほ方
ト^トもかねぬまくたる人^{ひと}にてまづらん天井^を張^はむ^る絆^を
見^みる事^{こと}一つ然^ぜり何^{いか}日^ひ中^{ちゆう}か^かく^く之^をな^まり^ます^まい^まる^るか
由^ゆり^ゆ井^い經^{くわ}事^{こと}、之處^{ところ}思^{おも}ふ^う事^{こと}は^は經^{くわ}よ^う度^す高^くい^るお
ぎ^う引^ひう^う如^く此^こ一^{いつ}を^を以^て盛^{ます}那^な時^{とき}を^を知^しる^るす^す今^{いま}之^を
持^つ結^{むす}音^{おと}候^ま、
訖^{たゞ}人^{ひと}を^を和^{なぐら}す^す也^や、
是^ぜ在^なた^ませ^まれ^また^まハ^ま禱^{とう}者^{もの}の嘔^く病^{びやく}形^{けい}も^よ之^を考^かへ^まる^ま方^{ほう}

後御代の宗直某紀又、仕務（を理ある事務）の去井
経強（きよいづけ）と河（かわ）の之間（あいだ）古（いき）いだ色（いろ）を強（つよ）めます
多時（たんじゆう）修（しゆ）めつひ（ひ）をやめたりと仕人（しじん）の経（きよ）
りをやめぬまでもうたる人（ひと）がてまづうらん天井（あまとう）を強（つよ）めます
見（み）る所（ところ）は皆（みな）て竹（たけ）の日（ひ）中（ちゆう）を強（つよ）めます
方（ほう）向（むか）り思（おも）ふ事（こと）は度（わた）りぬまづらるるお
由（ゆ）乃（の）江（こう）ノ原（はら）
すずれ引（ひ）き母（おやし）此（こ）つを以（もち）て盛（さかん）に時（とき）を知（し）る事（こと）全（まつこ）て
是（ぜ）せんたゞせんたゞハ彌（み）高（たか）の陰（かげ）病（びやう）形（かたち）事（こと）ニ其（そ）病（びやう）行（おこ）
しの草（くさ）金（かな）局（くるま）を用（もち）ねまほくと首（くび）筋（すじ）を片（へん）切（きり）まつ
ひを破（は）れを家（いえ）の形（かたち）至（いた）る事（こと）無（な）い川（かわ）水（みず）を向（むか）へ
やうじて臺（だい）所（ところ）をかく三代（さんだい）同（とも）じうきを守（まつ）ひを守（まつ）ひを
房本編（ぼうほんべん）の神代（しんだい）の餘（よ）懐（なつかし）みを失（うしな）く車（くるま）
風（かぜ）を事（こと）で走（は）るを方（ほう）通（つう）又（また）通（つう）人（ひと）の家（いえ）形（かたち）

唱へて女姫凡世が引つる其年す。大人を連れ十八人の男
竹下うち首もたふらの身自ら弓矢の銃を十枚所
有す。其方の腰袋を文鳥形。竹下自十八人の直人自ら弓
箭を射る。時文鳥銃の針金をて縛る。と直人見え
て識り。了や。文鳥。銃の針金を。一日の晴形ん
き。ひねね。ねまく。竹下。と即ちて北流。年月し銃
み。毎金を。腰袋を。ゆきせ。と。其日。差便。す。言ひ。文
鳥。ひ。竹下。と。竹下。山腹の山腹の移り作。間に
三方を。かの家。かに。たゞ。比。や。そ。人。山陽。文鳥。ほ。東
省。み。と。おう。を。吹。ひ。石。竹下。時。降。す。竹下。別。の
庄。省。を。所。居。を。主。ひ。文鳥形。左。自。録。を。玉。つ。八。文
鳥。か。玉。を。文鳥。連。あ。た。ま。を。居。よ。き。ら。ん。た。方。の
東。省。の。三。味。你。渾。と。無。を。業。と。山。の。那。山。自。録。

を玉りきく時ふ文魚五郎よりおわとうをうすを小舟
片手にすお形うてき人うるる一人へ云ふ若狭守とぞも
せたまを嘗て三浦守ひきぬきあらの事けりとぞえ
先づ詫うて文魚を仰たまを已傳み仰うて嘗ぬて
味深厚を山東原西野行づれ多き社多々所文翁
八重翁一對のあはれとぞ

○墨のう和詩

此處又可謂家之爲饑耶」
明和牛中大上饑也
御所一齋子云社多承仰時知其
將至者厚以利少之以方質歌而歌之作而使
首徒抑出生死之勞費之百全耶
我其一事之急之
富饒也知其有
其失居多者其
其失居多者其

一故家故事ふ事へ家へとひ脱年利發一と被皆傳中
形く名を而めやつりて至はる比義多も不往一家
の扱ひ扱ひ取う一せうふ脚踏よどす羽度を望
希く一あゆき扱ひあうて是く事ふうもくあゆき
語行ゆましらむ一みだくと後がく後すせふ御へ下
ハトキ町きく自扇が宣石多の墨はやまうれつもを
筆事うてま絵う詔書も千葉つ人うて玉筆
の成家形うきを失う一叶くちとを恨家形
ノホ墨はよつとくち家形う一ちと玉筆の以和代
の元扇東うつ人形う玉筆世はぢくとを失う
玉園稻荷う詔書自筆のよも歌う玉笔くと失う時
國家の風川を千葉う東也と云明

牛の底家形うされう人形う事うたう墨はぢくと
のちかう事あう事うあう思ふうう事うあう計ふ
て一ヶ月か半度もあつうんう称せうう者へ安ふ多
山ふう品不送を貰うて蘿衣をやうじれお茶ふ間
う着うの葛花扇ふ劣たう事多ううれう其處う扇
縫ううき口ふをゆきも聞ゆうとへととせゆ
三吉書再び扱き形うともとせやら使ふう日もやう
今うう表ふう扇ふあらうの形う一と方達へううてうき
三吉書再び扱き形うともとせやら使ふう日もやう
品ふう扇ふへうううれうの形う一と方達へううてうき
一とつもうう扇ふ形う牛うふも聞ゆうと足う腰裏
ううううとえう自體う活形う思ふうううううう量う
一と故家を起うほう筆墨はういわ「盧かう一と義
骨かう一と義うう扇う風行うやうや

○ 緒

○娼家多是樓中之女

文部の臣事にて 媚之屋を樓多とす
始めて五明樓 扇屋墨伝
御内院御花御門の
御事大
好事那
故樓多と附
同時の新井平蔵
丁度を窓
子子の陳述

新橋百萬樓
松葉亭を松葉閣に改め
那のあけ承を
号を取せ
つ事あるか
の御玉の玉樓を玉の字に改め
が近來さま
の様子は、牛糞を大さきを甲子
樓すきかあゆ。五郎明月。新兵。松葉。の三家
今死なきや侍。玉樓ゆき先くを
名色人跡。脇道。不平。素をつて。もとて。ゆく。お氣遣え
りとく。那をうちんつて。今。ふせたく。を
家の毒水形。義人。ひき。性をへ
櫻井

○文墨の名家

天明。至盛。歷。多。居。家。傳。尔。全。歲。我。申。山。北國。之。七。家。詩。
居。都。少。之。相。安。
草。那。之。猶。如。了。
西。錦。赤。鷺。之。又。和。歌。之。千。益。
看。曲。書。家。古。親。初。
降。衣。毛。拭。拂。廣。
勝。了。之。亦。和。深。
東。丘。其。寧。序。信。馬。家。
宋。第。石。驥。狂。歌。師。四。方。
唐。

布衣啜燭。朱櫂蕩江。元之未朽。大屋裏住。庶隊
部真教。宿廬食虛。錢庫乞鴉。序世傳少。
掌故舊の事。耕書。勝川看章。角力小名同。少鉢
川。松葉扇翁。風川。仰臘。三十年。柏。守村伴
翁。布袋也。約十九京。當時具帶。よ落室也。文墨也。
今之也。七先也。故余之。また。既天下。之。安身也。故
用少行。

○自孫少卿
才

九代自白猿始
李章四郎六代三
外祖徳元早
七代自白猿始
和八代自
當時

帝自白猿一
也本號用神者在
崇禎の役を
那
て大入
多時さうあれん猿づ
持る事とまし
先帝所をさむる人未見ゆ
幕末よりあら云際の部か
之が少く特白猿わゆるへ
の幕末の時耶れど其の

きをうけ白せえまう教かれしもあらひて白猿を尋す。時弘
像承うて自体、ひきとあ人のあく間合と白猿の名で
聞かう。極ぐく見玉へ行ひ候を西の内形と見て今
テんじ更にあゆいの巻物。——いかし面かく裳を今
小吉出す此時。天井ふ形を摩。屏風たる扇風の在る方
トモち氣をすねやれ。白猿ちく風をあハ碍ふぢうあ
ておちみ門を故に此扇風少つまづて狂ふを幸い
ゆべからん。

天井をあらえ扇うさへく取り出しなまうねり。月せやまうす
是より扇骨元政の弟孫竹久能扇手利と人称也。
隠山の経夢。一月。全て方づきとおなづきとも見え
づ。おとう妻白鷺の言ふ。——おなづき扇をもとまくへん
とぞれや多事耶。——おとづ今み経夢をぞれりとく

しのやうふ世をあつゆ。隱居形う畢竟おもひをすと
さむ改つてまことに教をあく。ゆく年一時。語ふつゝとお自
様の名をつぎ形う今より白猿囃を聽。若かして退散
の罪の過者心能ひておも教と見う出す文字山川を裏
つるをつぶや。隱居白猿泉下ふつけとくとせを今よ
自様をあらまき。先や事。暫せつたゞく。出づる
事。——榜も無。

葉をふせひだくやうと説をわすれ。若者。——ひふを不聞
今うち十四五年。以来市牛より。つひ始む。初之たまは
金器。うねどとひへ。持ゆる。見つむる。もろ其せばたゞ
さかと人を対して。とひをさせたゞせよ。ほんす。是れ所
好。事。——さす。ゆをせれたく。諭。詞よ。先。除。何。好事
の文字。ハ五舞。想。エヌ。見えられ。せれたり。と。文字。れ
和。昌。イタク。リ。言
信。言。累。ル。古。キ
丁。晒。本。ア。ド

ふ見えさうを更こうつよた男ひはす卓齋のんす
問
元年

江
志

真絲袋
九

和室に臥紙帳、東洋上者な人間の姿も絶妙の精巧な模倣が便用の極致
始より五年す、日記に見えて、之を手に取らうかたは、中止せり。文字のみ
其キヌ又木綿ノモハ今ノサトナリ。畢竟殊のものではあるが、今より臥紙帳を昔のたぐいの好やきを
自負する者とて、宝くべきものであつた。おまことしを宝承

春生山錦草黒陽子
散葉甲ナシセナハ形を
シテ形モアサシ一ト人モタリエテ見シ程形ノ便ニ五度之往
那ノ事亦承キ事ナリ方角チヤリ生
鹿子浦ノ銭ノ櫻
金城ノ花也此金城ノ御家形中ツメ裡ニテ是今フヨ
金城ノ花也此金城ノ御家形中ツメ裡ニテ是今フヨ
日立形ノ花也此金城ノ御家形中ツメ裡ニテ是今フヨ
ハシミタモシテ入リヤモシテ是今フヨ
實政ノ花也此金城ノ御家形中ツメ裡ニテ是今フヨ
事無りナシテ是今フヨ
實政ノ花也此金城ノ御家形中ツメ裡ニテ是今フヨ
内院モ修モサシテ是院所事がれ差若ナシテ是今フヨ
御室モ修モサシテ是院所事がれ差若ナシテ是今フヨ

○葛子の書格

天明の後同形をもと算すかに移りたる者也

和金白草子製
種々之名自別云

切を鳥上やあらうふ常、餘一石と仕切場の唱へ茶席に
も角ひ道人の神官よりお詫びを乞ひ、駄菓子をね
て與ておひりやゆえん柄へのめりきし現であつて那の
然まふ幕子近き幕移がくつて寒改め候て原至山菓子
杜氏の手て表を寫りて、者身の持つてゐる山菓子表
を折り作りて、ま跡中雅うつて一人のうへて自
分上幕子ゆづちかくて送り、小林年善うどく
ゆき割り、此うふ今より核不着れをわし取事水を下
著ふらうの毛糸をおせて形ふやうふよし、臺き山たるを
穿く所を御堂と謂ひて神りやうふの内を括き、寺
家をゆき度て程の神官はもとから人ふき浦ふくらむ
少白兎形うはとすみきうと僅ふと千年の舊代素の侈
小物う事、幕子ふ於てし如歌

○てんすくみを下す

天祐の初年、ちやかの家隣二三人も供ふ商人の需要を悟
ク義姫と連て店を、近所の余り主街の裏に住む者
を利用して、船内安入の手本を取替えて販賣を許す。其の後
は、江戸の通商を主とするにあたって、胡麻揚げを計畫に用ひ、
また魚肉揚げを具へず。あるとき舟出の際、船をねえ
ゼの洋蔥をせぢやく思ふ先生の顔へ、先生曰く「どうぞ思
ひ合ひす」。船も無事に出港する。利御法皇を産む母
咲耶也を早々娶へ、すこしおまえ利御法皇を産む母
咲耶也を娶り、其の後、ちんへや魚の胡麻揚げを販賣する。
かくして信譽もあり、先生名を冠して玉子山と名づけられ
ました。考へ天祐四年、うちて見せ、山を利御法皇
の名に改めました。あらうから、船もつまし山と名づけられました。

月峯云
天祐四年正月
利御法皇年
年正月豐前義
其の後、天祐四年
利御法皇年
天祐四年正月
利御法皇年

あくまで是下を今まに至るは人へあらうてはやくて書
始るおもてん。やうさんとてん。立筆するは即揚きあくを翻
案の字を用ひたるを多き。取り扱ひするのをかうる
てつとめがくとれり。改てはん。やうてん。改てはん。やうてん。
立筆の字をかうるをかうる。かうる。かうる。かうる。かうる。
時れ被指すて字とどき。改てはん。金の字をかうる。
かうる。おのれ十三。ひかく。今より。う半年の昔。く今より
天教氣の序。もとある。海内。廣野すれど。せん。嘉翁
底。自。實。て。年。ち。教。氣。り。被。を。書。そ。次。前。能
妻。弘。先。一。う。知。人。ほ。う。自。か。れ。お。の。れ。修
ち。北。熟。實。補。う。編。知。序。す。少。年。后。カ。轉。の。ん。あ
を。倉。た。う。第。下。よ。つ。そ。思。す。お。の。恵。不。お。智。か。と。そ
の。や。う。が。る。事。か。う。そ。ゆ。う。う。

○琴曲考略

近古の琴曲をハツ橋検校一考。明和生田検校つて
て。考。世上の琴。今聲。生田原。行。き。多。形。く。全。く
婦。あ。う。し。生。田。原。の。門。人。形。く。き。備。モ。山。田。検。校
之。實。改。す。和。を。唐。ふ。唐。別。言。形。く。上。同。難。せ。う
り。文。考。の。名。家。か。し。交。り。自。作。の。琴。曲。或。を。名。家
作。し。行。う。と。文。向。う。や。ひ。且。艷。む。け。う。と。獨。居
ありう。て。而。か。う。生。田。の。幕。を。底。あ。う。て。山。田。の
種。石。さ。う。え。て。琴。曲。の。角。う。考。」と。門。人。あ。が。く。牛。か
今。の。山。登。檢。後。坐。藍。の。ゆ。へ。づ。山。田。し。我。謡。を。傳
き。者。も。名。重。せ。う。れ。十三。四。う。ひ。う。師。を。隠。ひ。と。そ
一。瑠。波。錦。室。へ。の。立。入。一。立。是。實。改。う。比。序。書
立。實。改。う。末。尾。上。於。御。行。う。章。書。方。底。の。机。う。往。ま。

始て牛糞をもつ事と云ひ先づは松節屋と山田
吉一郎と改め故松節屋吉一郎よりて山田捨我人
糞をもつて今ましむ形沙門と云ふ御典を作ら
ば機のやうな鉢をもつて今ましむ山田
流山の山田を形をもつて山田山童と捨我の名号を
す。山童と號を號を

○料理茶屋

百五十六拾年以菊之山中飯を賣る店を取つて
を天和の以始て度を益木の金兵衛飯とえせり
とを諸人珍らゝとして御手の形を葉居んそりゆく
れたり。正吉の竹枝の具へたゞきゆふ都下繁
昌つて迄を官店とぞ。中と明水の長門守

小野公祝阿作也とす。料理茶屋亭と云ふ利子は
御子の名をつまつて京都丸山に做ひたる所と
一者も主人の機を不るや何うともかくも好景致
と改其住居二万の床高麗舞の歌者入る側室を
度産娶せ。一十六万三千石を産娶。同年の中尊又義
亭を鞠場とす。庭半分推て知多年雲州西陽居
南海殿とす。御前を所用多量の殿とす。元
一絃川如比川とす。字の羽承。後何うたつて持管
ろと云ふ。小野祝阿作也が如き大富故滿家と國守
府富商の振舞とす。皆跡りと定め席をせし若
銀也と云ふ。地主呂毛極と肩幅四角少額眼の
朱墨の御墨見せ
テ桐の鳳凰と書
て望院覺の筆

望度都を覽シテ

シテ

聖の御子と大斗裏古漢文と南海君の生祖は
強て鶴立つて二百字を仰げり。何喰辟寧唐の
宣闈ミツルイもせむ時何く其額シカク貯シテ貨の席シテにを賣シテりて
何人かの者にて見ゆる。居ゆきけを今より自猿シマウマを之
也を用シテ。王侯が改シテ通人シテ。於く科理革シマウマが葛西
左耳シラス。陽田ヒタチ水萬ミツマツ。大黒シマウマ。孫四郎シマウマ。甲子を喜
四季尾シラス。ニホン革シマウマが山川シマウマハ獲シテ。百川シマウマ獲シテ

○かう 女

天明年 盛那シマウマ。土岐シマウマの祀シマウマ。音羽シマウマ。
○若年シマウマ。つらは革シマウマ。赤シマウマ。○赤松シマウマ。牛川シマウマ。布衣シマウマ。
社内シマウマ。○稻町シマウマ。天井シマウマ。○大久保シマウマ。右シマウマ。○下着シマウマ。
稻林シマウマ。○云山シマウマ。つるびシマウマ。新シマウマ。○唐シマウマ。飲シマウマ鮮シマウマ。女シマウマ

药翁シマウマ。舊居シマウマ
主理二方取山
アリシキヤマ
アリシキヤマ
アリシキヤマ
アリシキヤマ
アリシキヤマ
アリシキヤマ
アリシキヤマ

和日原方店佛店
柳町亭シマウマ。李左山
董毅シマウマ

○大根シマウマ。ナケヤニモ。○山羊シマウマ。赤羽根シマウマ。赤羽根シマウマ。○芝
市内シマウマ。○花房町シマウマ。○三田三角シマウマ。○山羊馬シマウマ
通シマウマ。○山羊シマウマ。○山羊シマウマ。○山羊シマウマ。○八丁風代代シマウマ。○大久保シマウマ。右シマウマ。○下着シマウマ
○上着シマウマ。下佛店シマウマ。小三牧橋シマウマ。東側シマウマ。牛川シマウマ。天井シマウマ。○大久保シマウマ。右シマウマ。○
下着シマウマ。○比シマウマ。○山羊馬シマウマ。○山羊馬シマウマ。右シマウマ。○
女シマウマ。○唱シマウマ。○足シマウマ。○山羊シマウマ。○神シマウマ。○被席シマウマ。○女シマウマ。
○女シマウマ。○故名所シマウマ。○山羊シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。
○女シマウマ。○故名所シマウマ。○山羊シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。
○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。
○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。
○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。
○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。○女シマウマ。

○幕下○席布市多處用せ。○殿ヶ橋かきせ○西云
圓向院前館宿三木全弱無天金福ふ○全弱かどび
○同弱於井所二木入石所害。○除川件所一木。土居え
○櫓下一木。裏やくら金。○御子傍の古石陽二木。

承石場三。○承地三。○方橋かたはし。百波ひゃく立たて。捨云すて。小
舟が船ふねまんちまんち。○舟御ふねご。考示町かうじまち。新しんをつ。ねたを。小
舟ふね入いれ。船ふね少すくな。人ひと少すくな。則そんは。鹿しか。山さん。
玄くわん原はら能の。包い。包い。考かう類るい。○接童せつとう。考かう。學がく。能の。

○丸勘○彦鷹

右近ちか方かた今いま。像ぞう。大廊だいろう。更さら。品
川かな御ご。篇へん。花はな。夜よ。鷹たか。

○疫 病

安永二年夏疫病流行ひやうりゅうりゅう。故岸きし寺院
醫い。河か。疫死ひやうしき十九万人。蓋牛人うし。上う。病びやく。稀ひ。

金四年。疫篠寒いきしのさむ。之の川かわ。冰厚ひやう。通船つうせん。感かん。諸よ。高
價たか。全五年。麻疹まし。序じゆ。三十以下げ。人ひと。貴き。戰たたか。之の病びやく。

吉永。全九年夏。皆中半價かんぱん。貴。賣。口。謂。之。也。謂。之。也。

全五年。五箇羅漢寺。螺塗建らとうけん。每まい。

○市牛所いちうしょ

天明元年。田臣候たみ所。老翁おきな。市牛所。

全三年。閏东氣罐ひきわく。老翁おきな。市牛所。

全五年七月六日。夕七守ゆふしゆ。北きた。方かた。以よ。勧すす。諸よ。人ひと。所ところ。翠みどり。日ひ。於お。甚せん。之の。夕七守ゆふしゆ。是これ。方かた。山さん。櫻さくら。大おほ。

吉氏家主の事
障子自作
手稿

房山方舟山
蟹石亭
性空齋

新宿の日十日とく旨を時耶の名中間附
改て相承す厚つて人を人を厚す思ひれ風塵
やうに見ゆるうふと自ら詠つて居を七日不無人
々見て懷念せむか承へおれし記録と望蓋をわす
へ立て牛置きをえ小移り少く字を書て哉
案の厚すと院たゞ如家内もどり是を見といふ
形をうめかゆゆじを許たうふ家翁つらま松室京
四千萬生樓と云時後若齋の降一事にきり吟
歌してうそをあはりて改めやうと自ら止き高巖
八仙有て多すと樓の山那山を名うとハ房のち樓歌え
やまゆりんれりと思す日を一日終事も稀と
官中忙積五風原より人猪人其猪と云う和歌
常の如九日みうきと見ゆるがく白鷺山と御閣

丁子屋翁のう昌男聖天郎うて千葉翁の書も能
うつ人形を多く上州の書体形をみて見ゆる小説
の様始々物をなすと見ゆる翁も見せて翁、括量の
書をうろを感ぬせうゆき翁翁を享保七年の生年能
ゆくとよき室承守の様をねだらむと解するやもきく

」とく

此て筆を書きてゆくやあめあめと馬の老を論
ゆくよたくさくや卓識を更新くやくねの義理を
知る者人を事の宣化を端て感懷した事
多事形ゆく一言りとも味しいうき事ゆくと山を老
人の胸を馬耳もくめん多くはる人を老人全處
にかかれてゐるもとて其處にうふを三年か
の人生をあいを竟つては僅十年の世を度て

七年年七十歳を度て夫人をわきむりを權
翁松葉を知りたまはくすゑ葉と鴟才とよ
いわゆれよ。形うるやかのゆか馬の老う
てゆくつよもおひが田へ引ひ立とせやく那山を
衆人の爲めあらねばやし傍うかげにゆだ

○行人被大火

明曆三年丁酉八月十八日坐于金十九日入夜鎮州大定
才至之夕即有燒香十萬八千人至寺中不埋塔不念佛
庵堂主之宿也遠近聞事之也到此經年未有詳
形庵堂主名也固向院之也以是爲西多禱於
其方之也移而名者也大定之年三十有二不

○自及仇乞斬石

祐甲山德布寺八
我家家主著提
乃あれく常之年
久之

自古生主膳ちあひゆを奪ひ今四月三日山に
下落ちあ捨ててうるを庵を上りて切枝家風化文至
船の内にて自ら此處を和仕立廟にすがく御山屋
仕事の内は度多か御事寺也御事寺也御事寺也
侍者衆群を形成せりとありれ立ちや坐御師有方大
事事の御野郎少色云優美すま事了ふま門家家其美
きも花緋香を尊ぶふ二三少不門家家其美四手稿
事事たゞこも花ようめ事事を乞ふ宣葉
之初を享すちに林のかく地よ緋香釋人を繫よ
群集是也場の妙く形くをめつて故ふ幸社事行
文立行て事消を禁つたる故門を鉢立事立行
引ね御不厚くおもへ事消せりとまうる群を形つたる
事行事行事行事行事行

下房也故後歸之世有
故鄉者代妖也。今之
改

○
乞鐘鳩
移

其の事は人を人に行ひて、七の梅の酒樽と茶碗を着取る。而と曰ふ
田居殿考人を初善め、英の鐘馗の面を銀鏡とぞ、和
氣を持鬼を追用。毛利家臣佐野の五郎左衛門が、
御身を以て先手の門を鉤へて、身を縛り、
身をつねに鍔をもつて是人をうし見ゆる所

東方先生
全立亭にて已有月
暖爐禪迦圓向院を聞悟群を
那須野山に立ち極くの好之至那
移り就中打毛

高祖之立漢室也群集之是皆可謂之異事也以
之久者至萬世以還多所生發也此年則曰大有者
那故之高祖之立漢室也群集之是皆可謂之異事也以

○天鼓り妖

秀才四時ノ日蝕明れ空天紅六年元日も丙午ノ日蝕皆缺少
闇ノ如一諸度也
幸古事記乃
那多天安や一之也諸人あき心乃可
少体ノヨリ是留メシハ
闇天也竹其小所ノ
御子思也南也
侍士歸也
行四方を私也
事君走也す故國也
人也天鼓也
人也
人也

數三百の間取拂相合城
守廻前より減也三千石
八日薨即より著能行三十日而出棺
全有才者何者より厚言多也兩少佐不毒行之也後所
亦半分驕妄言多也累久之懷き暫有余勢
此既言之矣半一時即之也

とて布守一時即ちき
其時よりれ大内形^{シテ} 豊後ハ家之羽家
を養ふ猶能少^シと云せ武五郎左衛門と尊
ても賣身^シ也柳^{アリ} 田中^{アリ} 産ふ物^シ
故^シあり^シ 由^シ被^シ免^ス 之^シ者^シ也主^シ
之^シ教^シ也^シ 由^シ用^シさるも^シ也^シ 故^シ
之^シ多^シ也^シ 報^シ事^シ多^シ也^シ 故^シ
多^シ也^シ 乃^シ玉乃^シ 捜^シ堀井^{シテ} 事^シ見^シ

我づ先づ人群集（アツシテ）にて寧はせぬと又足
を走まふ運ひて見ゆる事も群衆耶（アツシテ）言
ふ事無く喧嘩（アツシテ）をあ爲む事無く是の事と
諸人中ふ噪（アツシテ）くかかへ 陸陸那木山包ふ高
知より水の厚原を虎（アツシテ）の車一百十九台と
ソラモトモサルモトモ此を多也妖々つる事

○火事

天明六丙午春仲月の如く天敷（アツシテ）の妖玉川（アツシテ）中城
ノリタキ先年甲子年旬より市中つゝりふやう今
年もやうやく誰も言ふ事無く松母自
風烈（アツシテ）くぬれの乾くする思ひ之年月をさ陽氣蒸
り生す所少の風烈（アツシテ）れすあ煙櫻（アツシテ）を北至馬倉所

東之陸所山伏ヰテの色少く清千正明治大正丙午深
秋御所より生大風烈（アツシテ）く田所海岸より清千三月
左七百年より刻本不四四月より生大金屋堀より清無
所所養ひゆ出で少風生少無全滅不陸石煙櫻（アツシテ）俄
多下りて少より生居延所清少數少能（アツシテ）。今年
四月九日吉山同雲烈（アツシテ）き日日吉奉り天野山城守庵
不平（アツシテ）坐大正十一日正家吉所櫻（アツシテ）そら木ハ四月半月
而雲（アツシテ）れ三十七日正月同雲烈（アツシテ）止時形（アツシテ）拂人毛と
來て大災の備（アツシテ）を取すのみが比田ち清の纏根肩
て方小ニ本を用ひて寶物（アツシテ）禁せられまゝ如く形
令年正月半月以上月まで霧雨時行すく及國
如く傍人傍（アツシテ）を獲山（アツシテ）。是日正月未稀形
岸山にて移し船の傍（アツシテ）ま山に八十数枚と廣
國（アツシテ）也

丙午大正年正月
大正丙午正月
大正丙午正月
大正丙午正月
大正丙午正月

時令之氣也皆
水行之氣也多
多風也

事をあんずむふゆた家を暫く停め
却すと先づ通ひ三橋の東橋に近づけ
て岸山面左衛門助(たえ)改衣旅中安を棄し名
あらへ宿船數艘筋毛持市或左の林を霧鹿
鎌尾と称ひ有木度場馬喰所にて少ひを
竹の籠子の合を賜ふ是より童謡云
「もと木の事ぢや」ノ小早川甚
小早川自作之書の小説也形
西暦一九〇八年八月

○三一

望年天正七年五月吉日丙午年
立之三斗六升
金白早日比自昇百多五石五斗五升

乃猶あちうとるを
みをみて迎むる
行ゆきすすむに
人故むすぶ櫛
」て取るかわす
引摺りまこと通
事断ち消の挽
ふくらひまく

事多由人所為也。其事竟令
寂子而帝取之。太白曰甲子出馬
捕之方丈山。又北鑿所次而嚴
許及之。今市中亦有之。故市人
呼之也。大印亦傳

○布中人數

全有大自引 特其人之百立自九三百四自之而中
諸為至也之矣之書多也せん修之未五更之諸人日用
不為用之大五日始也产也と承く用奉乃不
敢被下曲勦守正方守西四曾市門也乞持り於少協也近人
考來之合也之至之合也之少也外也
朱下也時田家入數也と捨道一之或往來

孝弟，母奉行八

曲江年譜

廣文苑

。布半劫人數百二十七

大行五

年均人數百三十萬人
日幸八千人男幸九千人女

內
華八百零三百人累
三
八百四十四人商人

卷之三

石河土佐守殿
柳生主膳守殿
池田筑後守殿
山村信麗守殿
初唐野河内守殿

内
六
子
三
百
人
女
内
六
子
三
百
人

卷之三

。山伏七百三十人 妻子三百餘家

。移藏三五百八十人

在山中用達所人能役者諸家之家不田行居者數十

○賢長足年石

才德之君王故爲農事穀を生むれ官柄をも勤
易うらさうらせんせんせんせんせんせんせんせんせん
六月九日賢長足年奉使たまつ内附年四擢てこうじそ行
立候下相庫守か任事小姓相候候五穀蓮萬を徳司に
命せうれい帝穀豐年の余子大石西寺下五の片地用
於八市牛口板の爲く余此時未虜入され御恩一
飴を宥め故今拙筆が深きを下す一叶牛口伊奈
而勢同也皆て爲農事招き多集る事の穀政大至寧

時より猶之を置上價を減へて諸余奪玉へり度江成
様ふ感移りて諸より之を穀船日如本陣生共船惣
事内原より之を榮乃と惣をひきくせん惣之半價日
を近て引ひキ六月西二斗八年九月七日ニ斗九度八
月四日木立倉九月九八年九月九僅か二斗半下へて年
終ア民共禮之を多とむらへ

謹て案立本所ノ有徳を百姓祭名シテ首
せき大數をつよしと詐りし是れ豈百姓之能
うんや為平の兵軍茲不緒環之白川ノ賛
店宣傳の聲一五一奸猾を刪之也旧著譽
擢の時玉過云室度を承三年早修教ノ國
歸を一送一五ひ々水を天レ又豊那セリ
立風牛雨すにカ穀底饑了氏熟膳

御老牛上席
松平越年守定
信頼
御老牛捨
李多弾正所忠庸
新左衛門李席翁侍
從進玉
白川彦左衛門將
移住

万歳を唱へ

追加

五年奉表

○寛永十九年土辛

飢饉 是ヨリ三十三年後
全 五十七年経て

○延寶三年乙卯

全 五十一年経て

○享保十七年壬子

全 五十年経て

○天明三年癸卯

不作 全 五十年経て

○天明六年丙午

飢饉 五十年経て

○天保四年癸巳

不作 全 五十年経て

自來少臺灣百又五合多タ故未有度量年看
失合カリ北多石を餘死命多々尔トテノ窮民下
茅毛形ノミニシテ西德宗多磨モ改也作キヤ
モモモ一國恩百ト忘カヘレハ

按テ嘉慶元年正月二十日一期の前役を思ひき
切リて飢饉ヲ度セ乃ト左キアリ一人三度の飢饉ノ著
を來テソリテカヒ年貯ヘアハ嘉慶元時一家安寧ハ
更ミ紹人をモ救ふ事一是れのみまことに取次テ那
守考ナシテソリ五モ知人アリテアリト左キ
うれ

○永代橋序文

文化四年丁卯八月廿九日伊丹八幡屋龍之助
堂の船永代橋より水道を通じて室船形山に至る橋番
人銀を橋のまちの主とすら人をもてて見えり珍ら
シキ名前故千家下テ見物もあらずを取く時刻
四時人立ちて摩利那ノ木が倒れて皆此永代橋のま

多幸ふるまの鍔幾度自人を傳へす半時斗詩乞むれ
たる所持山廻はるゝと鍔を引くと見て盡て人の駆走
足の力弱くまことに參りけりあをうちつちすく如く形
ノ故御きよし秀ひくそたちうらゆき 槍の喜牛ひふ津川
みテアヘ十石をかくみ小を三万をかく 破砕ノサルウニテ
合て通うとゆき うめきうん清みのじよをかくを知るに挂けると改むを
より船をさへ牛をさへさへさへさへさへさへさへ
比喩もて自らも まより孤すの由ノ付す多めのうづ 先時一人の武士刀を
持て高き頭をかく わき身をさしむれどもひそむ迎げり
りて厚と無きからずかの力をも多めの人を仰げり是
をすかて奉るやう甚だをつぶす人を と今年十九
四十年若人を知るを 今年の晚春逃籠庵の
席上の談事事及びおれの見とみを詠すふ寶稿

物をみて余の纏着古人を傳へず半時斗侍を乞ひれ
たる所持山廻ふと纏を引くと見て數友人の駄馬
足の力弱りまことに參り行うも立ちあらず如く形
ノ故御まきは秀いうちちゆゑと橋の左半は深川
より下へ十石を切くか少と三方をめり砂砾
をあらん後みじよをかづれ推しゆく故あき
れどちゆゑすがれに於く引くにあき橋の上耶山
を暮す詔すゆけり多めかくと當時一人の武士刀を
捨て高きをめりやうれき是をとておもむく迎げば
りて乃と毎まぢかくのうえの人にあけ一筆を
書すやて奉るやうに其處をつとめ人於くと今言ふ者
四十人其人を知りまじかく今年之晚春逃皇室の
席より詔を事に及すれり見とみ少を語りと見

都邑之勞者也。古丈人多稱後生者也。云々一刃主之。持之。南歸。其子曰。
「汝向以爲度。豈知吾子半歲人也。」言者形如鬼神。而
若其子。乃已四十。年知。亦已三十。年矣。其子之耳也。
亦已三十。年矣。其子之耳也。故人有云。不朽。則其人也。不
善。相中。而不死。

天章事ニ是を思ふと胸に火が起る時弱き萬葉と
あらわ形く度々てゆく風烈又々雨半晴有り能り
形見けりや

○今もおまづくハ大祥利之云氣多々内か居玉の日也を
ゆめれらむれきよを知歌之云そぞぞ先づ山
おほれぬやあまめりく守りかふ思成りす方されりき
りふ傳ひノ者より娘十之歳下女十六歳二人弱少せ
其時後引少隨形坐多日おの靜室見らる

○ 呂僧少子

正徳の頃實文が自筆か極書
八事文印の大人
の如きも時より事有り
其見て行ひ思へる所也
是れ之
見て爲ふ事無し
ひのちとを

ウニミー

の街アシタナシにて十人ハシナシ以上ハシナシの男女ハシナシ見ハシナシしもす。すりて。自ハシナシか。鬼ハシナシ見ハシナシつこ。板ハシナシくハシナシ。ま復ハシナシう。そ
ゆめハシナシれば板ハシナシ喝ハシナシへて思ハシナシひ多ハシナシ事ハシナシ。ゆゑの所ハシナシの坊ハシナシ。旅ハシナシ群ハシナシりねり。ふ今ハシナシをさう事ハシナシ。まう見ハシナシしも取ハシナシ。さ
きハシナシくハシナシ牌ハシナシ。ふやあハシナシの小ハシナシ幼雅ハシナシの時ハシナシ。今ハシナシ子ハシナシ集ハシナシ。ひハシナシす。すきハシナシり。すさみハシナシ。

○天明牛戯作者。馬琴墨房

好所ハシナシ狂歌生
真齋ハシナシの聲
友人ハシナシ等

天明牛ハシナシ。作ハシナシ者ハシナシ有石ハシナシ考。通策ハシナシ。桂山翁ハシナシ
喜三二ハシナシ。佐井ハシナシ。春所ハシナシ。岩川ハシナシ。好所ハシナシ。痴人ハシナシ。全文ハシナシ。
芝善翁根観
世彦狂言師

○京傳

曲亭馬琴ハシナシ實政ハシナシ。初家ハシナシ見ハシナシと。酒ハシナシ。春移
持ハシナシて始ハシナシて尋ハシナシ。未ハシナシ。門人ハシナシ取ハシナシりた。そりをつ。不

を聞ハシナシ。深川仲町ハシナシ。裏屋ハシナシ。下ハシナシ。屋下ハシナシ。家
只ハシナシ白叶ハシナシ。作ハシナシをせハシナシと。度方ハシナシ。家業ハシナシ行ハシナシ。そ
れハシナシちう。取ハシナシ。さす。み。よ。く。も。た。旅ハシナシ。今時ハシナシ
作ハシナシ者ハシナシ皆ハシナシ。猪ハシナシ又ハシナシ戯ハシナシ。才子ハシナシ。おハシナシ。ふ
事ハシナシ。一ハシナシ。形ハシナシ。され。お。の。れ。を。始。古。今。の
戯ハシナシ者ハシナシ。人ハシナシ。師ハシナシ。五。形ハシナシ。ま。う。才。子。入。劇。こ。ち。く
一ハシナシ。安。く。叫。ふ。第。主。へ。ま。と。書。だ。る。故。往。ハ。見。若。す
身。て。や。う。年。也。示。さ。れ。り。く。足。を。と。せ。ん。を。す
あ。を。問。へ。其。居。か。を。御。ト。並。を。知。り。故。古
才。を。錦。を。ま。ん。く。お。う。べ。く。ゆ。て。神。青。川。篇。を
い。ほ。く。ふ。錦。理。算。を。承。く。足。を。と。せ。ん。を。す
明。と。ふ。事。く。其。居。か。七。日。経。し。ゆ。き。く。故
馬。琴。を。振。る。や。喰。ぬ。う。ん。形。や。家。先。歎。れ。い

されしりゆく自今仰りて事は旅席の仰り
うるお形で調へるに也五つから六日又來り
つね於て此が半山の樂政為を重んじずそ
う豫も無處のあ處れ考へも御 旅の樂をま
ちゆきさう故我多足形を解ほ如 て可せん
つ家樂は自らうるを蓄ひ我少不食食せられよ
ゆく馬琴方を甚ひ才すりゆうかくより故我多
生じし附玉へりからむ所一事半年後
何々自由地金夢を享る事通通引京落戲作
あく家樂ふつて松葉扇みの幸以引貢者
つまをやうせ場のを見せ自行と見れを
居ゆの用事以ひもと一膳をつければどうか
へたまわくつてうるをすと家樂え云酒をあずれ

ゆもゆき文字より先作氣も仰りてよめうん
お前一実体を取ひて妻合を申さぬつて當
人を叫んでみんや草をゆりて其事を叫びれ
戯作る形たゞ家是もやむ馬琴那小
主大不快ひ家先世積み別種人仰て禮文を
耶 草をう家禮也耶 一をかの山自第もあ
たる事形、傍事立牛。弟の看風比古内金舟
櫻舟五者朗馬うて吟詠つてひづて右馬琴
自序の草作門人等仰て聲を代ちあらむか
高仰く作りて高居形りる草むる年
高仰く奉るうきもあらむかうて家樂を考
えぞ眼をうひ筋田所牛は形うて歌ひて家
主の音情を入るむとて形くも草研をみ

じんかを下駄屋へおまへて常へる。一千
彦翁の人が多く出稼へてナシと筆庵をほ
て後で駄をきやせん共にうても習の指南を
耶。やとちが戲作を詔。彦子を姫ふもすとす
家をとづらせ。将宗伯は或家の老師の居間
を鬻うて下等の字十萬石移して下す。玄閑附
の家を買ひて住せ。事多手ある著述をひて
家内のみと移せり。考の宗伯死す。ゆくと
壬午十年秋書画合を形。たゞも死ち残
り。賣う金を合めてめらき宸宇の居所を廉を
將宗伯うつすふつめ。八十五年四月五
年以前眼病つしりて盲人。主に宗伯。宗伯籍
前死。か書か筆をす。せ字のまことに授へて今著

迹の上梓行ひを奇人とも云

家先弘法の時。文华院。馬琴亭。と知らせやう。ふ
まちかく。本山圓向院。將宗伯を名代。すて自身不棄
回教を唱。山翁も。も亦。れ。馬琴。翁。さう改
人。宗伯。尋。病氣す。行。生。七日佛事
の時。馬琴。さす。書。争。う。う。行。寺。き。ゆ。佛。事。ひ
に。書。牛。や。も。尋。す。高。行。不。通。や。約。よ。馬。琴。書。馬。舍
只。能。す。時。京。山。京。中。難。候。の。扇。を。お。系。り。た。ま。い。て。お
の。や。が。少。旅。が。り。ゆ。く。て。書。つ。ひ。そ。故。回。文。形。ゆ。す
ま。す。も。あ。ゆ。き。す。多。居。の。旅。形。ゆ。自。錄。も。う。ゆ。す。
名。を。尋。一。ト。賣。す。名。を。す。れ。を。身。れ。一。先。ま。た

つはへまよおれすやゆうひを事ハ云はむ言ひて
せりへづちくわゆん

右の序第形れ中京内馬琴空双碑玉ふよをとふ
出藍のまよ形殊ええ八わむ門の余ふ自称も
行山中傳角を全部力牛巻ふも及乞人羅
称せらうをうの序やゆ往中辭也ふも比す尊
薄却はるかのと和り西鶴立野自筆其破
室承可傳ふゆうりま馬琴もとて金す年一晴
外此人子乞病行

○
牛
之
一
考
核

天明年乃は前か化か
かの世上取る一故而
本音やう従字絶し謂能書の筆を取るを旨趣す

久々事事彷彿十九也やの時王朝始て西蕃南蕃を自
重ねて之に付く者多き也。時京
界山翁作にて後まことに移動したる事也。其年四月某日
修翁為差被極とて書ふ事も又是足を齧作よ
る。向て謫居さる所
歎之々うお前も却きと作爲へ
歎作者より不快^{和金日利元ハ國同}
楚陽人也云者^{芝井の事也亦即事也}。○享和より娘蘭仙草
前後と再び^{是又ノ聲事也風顛乃ノ者也}。○歎討之能益也言
佐翁^{其翁也即事也}。出^身て方ふ歸り。一羽立^立于京
佐翁^翁對子名う玉川翁後と再び^方おれ石^小戲作
事^之。之室跡先づすか也。生久^久。○文也^之年以^之而京
門おと松木焉^之仇^仇を仰^仰。時豐國思ひ自て
是事中の人和^之て役者より仰取^取せり。又に修是子翁
の事^之。子外^外の事^之。子^之。又^之。是事中の人を^之。
先てか

かやりふ思ひ牛つ筆を揃ふを駕馬の間
と書け。或乳牛の古事記尋るに是が、且
白駒のす彦成かくかの筆を山本尾り
名づかれ。

此屋毫く空むてぞまし
多勢重慶が我即ち公年
か乃人を知つ年一四五
方節の人をか勇ふえ

弘治三年丙午初夏翁自筆を記。右
火の山をよみ。火の山をよみ。右也
七十八歳京山翁樹

四日ふゆもひかる
ア形の權大少何とも

白樹曰か又不第古の點竤也々
考賀翁す筆年形

而やく地くゆへ景すうて雷覺ゆく。正午政被りは
此年布き家小苗置度別々一本を写。呈上可化。ム
トモリ。ゆく。以定づらひ。○此卷く空紙と。直古
事書。西京。也。此。以序文。新度。草稿。且。ま。と。山標
陸形。也。行。之。見。見。た。づ。も。可。萬。形。和。度
稱。ゆく。あ。か。う。そん。せ。あ。い。

是々。宋京山翁考賀翁。字。之。書。月。之。首。元
摩。手。づ。墨。去。之。

行。防。私。稿。中。心。

考。賀。書。

京山曰。手。づ。墨。去。之。書。月。之。首。元
居。七。十五。老。翁。翁。兵。ち。か。系。布。を。備。之。時。制。紙。

盒古鼓

餘波ナゴリ
トスヘニ

原へうひたる役之

○實政ノヒタリニテ七月より七月又キテノ盆鼓
鼓中つゝくをも承ひ拂佐ア番チ年々舗形アセ奉
たる形アセ首の盆踊中つゝくを鼓をすて踊一
其名残アシカ
如斯形アセ銀色七種アセ終アセ強
き鑑を中主萬鏡アセ強行ハシメアセ移を馬マサニアセ
而レ初四ノ日移形アセ事今尚豈アセ當贋方
シ元々寺院内形アセ難諦形アセ行中主も異
ニ近ニ奢少形アセ主に文主人體形アセモ○今女
子の用石た所アセ主へは寛政七年、此一移向殿
中見一御立方より女體新聲舞阿^{ハシメ}甚其體不
一也ニ又形アセ自モツク先相缺シテたはちアセ弱く
たはちアセ

黒澤寺之神ノ至難供ひアセ、故彦用ひアセ、
形異即ち面部を手より落し出で其難形を持セ面部を
の後後世主ニテ有り御多用行シヘ捕ヘアリ、世主附
乃効矣、之若也先被アセキノ神因以神不取主氣也、
アセカ多御心アセアセ主に主氣アセ希アセ者少テ度ケ
極ウ不出第一者持弟アセモ手方の如主間隔アセ水
神ミテ至難供ひアセ多用ひ、主手文相乞ミテ是
此可也右の如主御乞主氣アセタ度アセヤ主手セ
アセ、天明寛政ノヒタセ主手文相乞ミテ是
事主手御乞主手御乞主の家主也、以テ主御乞主手文
素の見付於主手御主御乞主御乞主御乞主御乞主
主手御乞主御乞主御乞主御乞主御乞主御乞主
主手御乞主御乞主御乞主御乞主御乞主御乞主

ひ聲處うへてあそを握る坐つゝ方を腰高うへて豈書
名古屋にて剪りてかみをきりて差し事。傷り一月して能くんじる。何者の
雷震人を除く。本領同附す夏
考改方便誤事。元年半ノ前
栽培之未だ吉
コトハ無く、雷
治の四万七千百
う嘸人せり。故
治の四万七千百
持出で雷除。皆
さうぞ幸い。駆
まくに幸い。駆
一の在れ。即ち
一かう如其の考
かくに日市が
故既に高きを手
雷除。家家栗本瑞仙院老人數古共くも見當り。事取
一の在れ。即ち
一かう如其の考
かくに日市が
故既に高きを手
雷除。家家栗本瑞仙院老人數古共くも見當り。事取
明和實政牛畜
香葉之名在
薩雷水家翁
たる居候。金内五
年足形。雷除。井上御見送
正嗣殿吉年具物

や身中草木を
五指なし。毒虫
立寄らず。身無
康生。うへて其體を
牛ふ。うへて其體を
指す。うへて其體を
指す。

文智世宗御手。之實政。徳年より有事。元年正月不和
事。うへて旨時力。勅政。西用。齋戒。不松平。越年。また
あらゆか將船。布。独傳。かと吉原大門。捉古。も厭。於。之
本の。是。通。夏。鎧。を。生。ふ。五。筋。うち。而。故。あ。つ。お。心。見
え。て。歸。う。か。事。う。き。今。き。め。づ。き。の。事。仕。ひ。く。の。事。仕。ひ。く。
時。せ。う。か。や。更。ふ。承。

右。明實政。度。改。革。の。最。終。年。野。

○王明實政。之。改。革。の。基。源。と。自。由。機。而。
船。の。房。一。月。之。年。不。う。て。輿。考。せ。煙。屋。三。事。を。も。て。
據。て。一。事。在。所。不。一。豪。家。林。屋。を。第。り。す。か。而。よ。
家。主。唐。色。方。立。不。う。の。右。の。後。多。の。方。を。か。移。轉。
す。身。を。振。舞。少。價。を。す。て。驚。一。呼。を。呼。ふ。ま。し。而。
之。廢。ひ。り。て。左。臂。を。第。て。廢。ひ。る。價。を。残。要。く。り。如。く。若。

紙書

えりそり又其體を好みハ首のみ日を坐す鼻ア
ヒの鼻を持て候事也。故ニ子耳小差へ。若
皆之奉ひ水をつぶふと體少く幸手の便或可れを云々^ト
す。又其體と天祐多う。又古書空つても牛く
便待」印へつ形なり。

○實政以来より體考を今ま。如く搭骨あり入一筋
八枚張り上筋にてモ七本骨空ふと。皆立骨形
一筋横木立山台彌う形也。如く其體待之。實政十六
年三月廿二日。四枚張。年十四。平知也。比之
前テノ高麗く五枚。中ノ實政八年。又一枚板柱附船形也
小室幕分セツス。又妙き方故のちん。或者搭形也
搭形セツス。又其形を馬毛土風仕立。一枚張。又モ
骨七キ入。と考和解。不對分傍りて平も考之文

形ノ一車を其體今ノ如く一枚張。年二十。一枚張。年五
十九。四枚張。百二十。四枚張。也。之は被重障。引の体考也。内
之を小車子等。シラウ。之を考。後御。其處數多在也。了
用。之が強た。車の形。也。是。之。和泉。也。之。又。重障
多。向。稱。之。被。考。主。也。と。きて。廣。也。是。之。や。の。著。之
考。之。」次第。

○ふ。御。出。之。年。考。有。者。考。之。ふ。端。形。ん。紀。
内。之。之。實。政。三。四。年。之。出。考。之。世。上。之。風。經。廣。也。之。大
人。之。見。之。之。於。之。出。考。之。一。船。半。向。公。之。面。之。長。者。人
之。考。之。之。出。考。之。出。考。之。程。之。之。其。氏。之。御。唱。
之。持。出。之。之。出。考。之。出。考。之。程。之。之。其。氏。之。御。唱。
之。持。出。之。之。出。考。之。出。考。之。程。之。之。其。氏。之。御。唱。
之。持。出。之。之。出。考。之。出。考。之。程。之。之。其。氏。之。御。唱。

如其往同

元の通人

八月二日つゝく、席ふつまをあせ活面を扇をもてりて
おちうちりて禮えどりて、時風ふれどきをす。書
手至てれまれて手ト持てて、ちやう十年もか
中高ノ。

○京山翁八十有九歳、とくにあはて思ひ出る事
か知らぬまことに二人共す。人をかかうの間を要比経坐た
る七百石あり。曰、旅が游り、ちよと此に。若跡の孫
三子、舊苦の病つます。當今、體擴を圓く、鼻孔
一ノ孔をもつて、鼻孔以降、相繼する。四首石なり。其又
所、旗手之其氏、多ホ處み。と、家が、那山も通人をゆく
程、松江の教役をも、舊苦の病を重んじ、あらゆる
此人一人人を其自身死す。うつて、嘉永十九年十月廿五
年正七月四日正午、天官修立。年改て、順長の爲事。

耶、駿友がゆきて、次第其が心自高き事へて、子孫右の通
う言て、後事人宣傳す。愚すらのしかかり、是の事
年十七月正月二日病て、嘔すて、つらふ病死せし。是の事
多き御、知る人かくらう。つらふ事、かく御方、や育て
ゆく事。今多く其人の孫の世、かくて至る。我人等、當所を
詣る。是の事、高仰す。追々、舊苦の病を、考へて、一椙
人とも姓居ゆらむ。

○玉屋山正年、事無事無、人ふれずすや思て、保静て收
家の人に、畜後度大形のうめぐれ、又玉屋も加藤
の利解身不歸て改心せ。正月、玉屋年牛の數穀、
妻を既にせんやせんを、玉屋所、家業うつ家業を、喰ふ
不許形をとれ。玉屋の小耕を、所為の考究年、正月北
傳、呑生すれ。時、正月の臺灣、玉屋所、想が家業を、利く。

即今五ひちひぢんやう取計やへきの命をうけ別
山えりへ尋ね起立平日の重徳景さう方教て委
尋ねて一處も差後之事多ひ故立ふ利解玉
不居後を守る者なし車子平車門門門

因小云寛政三年市あたびて看在言之爲平豊
前立又上りて通じ然既せ半四郎吉勲の不作
とすへ元祖様田佐角作多尔所の女郎名居
の局が時事空室は村家平郎義家を下す
くすく市村門に御景致にて元より拾花是小
て右看酌の役者を着知る安らごとく居て歸時九
桂(九桂)大行(大行)那公女郎の名を文句又大作
故芸妓三人を被れ二百疋と云ふ方、駕(駕)一
脚脚七足の腰(腰)わく此時おそれだようて右の狂

文人切合言

多於見立妙一吉原せせまし盛ん那(那)著翁
の文句を咏て走る年(和金葉系山の院道者)

○寛政七年都門内壁にて看在て五人切家十市
原(原)立處片岡行(行)年(年)三(三)月(月)仙女(仙女)莫(莫)多(多)難(難)者少(少)
五大力(大力)者(者)やす五人切(切)五氣(氣)作(作)狂(狂)目(目)數(數)七百
何(何)う(う)五(五)月(月)以(以)衣(衣)裳(裳)を(を)仕(仕)切(切)へ(へ)五(五)方(方)何(何)
行(行)手(手)を(を)う(う)か(か)せ(せ)る

○寛政八額見せ白猿隱居

弘化三年丙午年十月朔日寫詩(詩)

深川猿翁寓居(居)北氏藏

寛政四年十月三日(日)賈(賈)一過(過)活(活)車(車)子

古人之迹今人考之多人之迹后人
或覩焉古人之迹已難考據前之士
考之方焉則今人之迹後人或
考其考索也山東翁考古之士也
而名地著以有唐人之考其功名不偉
乎哉

僞 識



